

## 八郎太郎の子ども／よみがえれ、潟を愛する心

谷口吉光（秋田県立大学）

今年の7月、コンクリートで覆われた八郎湖の岸辺に、わずか60メートルだが水辺の植物群落が復活した。潟上市の市民団体「潟舟保存会」が八郎潟の原風景の再生をめざして取り組んでいる「八郎太郎プロジェクト」である（10月6日の朝日新聞秋田版でも紹介されている）。

このプロジェクトを応援すべく、この春から学生と一緒に八郎湖岸の植物調査を始めた。胸まであるゴムの胴長を着て八郎湖や旧八郎潟湖岸の農業排水路に入り、水質や水生植物の生育を調べた。八郎湖に入るのは初めてだったが、排水路に積もったヘドロに足を取られたり、目の前をスーッと横切る青いイトトンボの美しさに見とれたり、今まで頭でしかわかっていなかった八郎湖の現状を肌で感じる機会になった。

特に衝撃を受けたのは、干拓工事によって生き物たちの住処（すみか）がズタズタにされていることだった。八郎湖の湖岸はコンクリート堤防からすぐに1メートルほどの深さになっていて、ヨシやガマなどの水生植物が成長するには厳しい環境だ。実際、東部承水路から調整池にかけての外側の湖岸には、干拓して40年経った今でも水生植物の群落はほとんど見られない。

水の濁りもひどく、光が通らないから水中の水草が成長できない。かつて「モク」と呼ばれる水草が湧くように穫れたという八郎潟の面影は見る影もない。岸辺にも水底にも植物が育たないから小さな魚や水生昆虫のすみかも少ない。ブラックバスから逃げる場所もない。その結果八郎湖の生態系は今でも貧しいままであり、そのことが八郎湖の水質改善が進まない原因のひとつになっている。

夏から秋にかけてアオコもひどかった。吹き寄せられたアオコで小さな入江が一面緑色に染まっていたこともあった。アオコにまみれて死んでいた魚たちを見た時は本当にかわいそうだった。

その時、ふと「ここで死んでいる魚は八郎太郎の子どもだ。八郎太郎は今でも八郎湖にいて、狂った環境の中で苦しんでいるのだ」という考えが浮かんだ。いうまでもなく八郎太郎は八郎潟の主と言われた伝説上の竜の名前だ。その後、ヘドロの上でアサザの葉がちぎれて漂っているのを見た時も、大きな釣り針の傷を腹に受けて浮かんでいた鯉を見た時も「これは八郎太郎の子どもだ」という考えが頭から離れなかった。

かつて人々は八郎太郎の伝説を信じ、八郎太郎を愛した。旧天王町塩口には「八郎足洗いの井戸」などの遺跡が今でも大切に保存されている。こうした人々の心持ちが結果的に潟を大切に作る気持ちにつながったのではないだろうか。今地域の人々は八郎湖への関心を失い、それがまた環境を悪化させるという悪循環に陥っている。八郎太郎は今でも湖底で環境の悪化にじっと耐えながら、私たちが気づくのを待っているような気がしてならない。

（朝日新聞「あきた時評」 2005年10月15日掲載分を加筆・修正した）